

知の巨人 角本良平先生を悼む

交通についてはもとより、文化、宗教、哲学等と幅広い造詣をお持ちの角本良平先生が2月7日に逝去された。まさに知の巨人というべき偉大な方であった。

角本先生ほど鋭い切り口での提言で我々に知的関心と呼び起こしていただき、きわめて多くの書物を書かれた方は見当たらない。先生の業績を語るには少なくとも一冊の書物の分量が必要であろう。思いつくままにその一端に触れるだけでも、都市交通研究の体系化、幻の時間便益論、通勤新幹線構想、国鉄解体論、交通学説史の取りまとめ等枚挙にいとまがない。「1年に一度海外調査をし、また1冊の本を書く」ことを文字通り実践されたのであり、余人にはとても真似のできない偉業である。論文はもとより、きわめて多くの単行本を書かれた源泉を、ご自身では65点主義、期限に間に合わせる精神であったとされているが、交通の世界に貴重な問題提起をされた独創力を65点と割り切ることは私には到底できない。海外調査ではヒアリング内容をその日のうちにホテルでまとめられ、帰りの飛行機の中で報告書原稿が完成されていた。帰国してから報告書にとりかかろうとするのが精いっぱい私には逆立ちしても考えられない実行力であった。事情が許すものであれば、書かれたものを角本良平著作集として世に残したい気持ちにかられるのは私だけではない筈である。

先生の原点はお父上の「聞くは一時の恥、知らぬは末代の恥」の教えからの大変旺盛な知る精神であった。知ることの正確な意味から、世俗的な常識は客観的な裏付けがなければ、先生にとっては常識ではなかった。教えを受けた者の間では、敬意をこめて「Fact & Figureの鬼」との愛称さえあったほどである。その真髄はご自身の名前では発表されなかったものの、まさしく角本先生の手による『交通論議における迷信とタブー』（昭和51年6月 日本経済調査協議会）に示されている。交通研究は現実を説明しうるもの、問題点の解消に寄与できるものでなければならないということから、先生の採られた手法は類型学であり、演繹体系の経済学には批判的であった。若いころの私は演繹体系に固執したい気持ちが強かったものの、今では先生の手法に十二分に納得している。

冷静沈着でなる角本先生であったが、感情をあらわにする場面に、私は2度ほど接する機会があった。一度は交通学会関

係のシンポジウムの席であったと記憶するが、パネルディスカッションで労働組合の方が先生を国鉄上層部出身の研究者との位置づけから「角本先生とは立場が違いますから」云々の発言をフロアからされたとき、「立場が違うとは何事ですか、我々は鉄道を再生させるための真剣な議論を一緒にしているのです!」と強い口調で反論されたときである。もう一度は角本先生が敬愛されていた島田孝一先生の告別式で弔辞を読まれた際、惜別のあまりに声を詰まらせたときである。席上におられた増井健一先生が「あの角本さんが」と驚きを漏らされていたのがきわめて印象的であった。長年の友である増井先生にしても想像出来なかったようであった。人間角本先生を見た思いであった。

角本先生は国鉄在職時代から歯に衣着せぬ発言をされていたため、ともすれば先生を国鉄嫌い・国鉄憎し論者と解釈していた人も少なくないのかもしれない。国鉄人が国鉄解体論、国鉄貨物輸送安楽死論を率先して唱えるはずがないとの思い込みからであろう。しかし、国鉄改革の目的が立った段階で、運輸経済研究センター（当時）の会議室で「これでひとまず私の肩の荷が下りました」としみじみ語られたのを聞いた私は「先生は轟頂の引き倒しとは真逆に、我が国交通体系の中での国鉄を真に愛していたのだ」との思いを強くした。JRにも各種の提言をされたが、日本の持続可能な交通を語るという視点からであった。

先生が万が一にも国鉄での立身出世を望み、ご自身の真意を控えた発言をされていたとすれば、ご家族に語られた「我が人生に悔いはない。やりたいこと、やるべきことは全てやり遂げた。皆さんありがとう」との言葉を残されることはなかったであろう。実に立派で見事な人生であったと改めて心から感服する次第である。角本良平先生、長年我々をお導きくださり誠にありがとうございました。

（早稲田大学名誉教授 杉山雅洋）

角本先生におかれましては、(一財)運輸政策研究機構の前身である(財)運輸経済研究センターに理事長として勤務された(昭和45年4月～46年3月)後、研究担当理事(昭和47年1月～平成3年6月)として研究成果を残され、また、多数の後進を育てられました。